

富田鯨船保存会連合会



富田鯨船保存会連合会
中島組 神徳丸保存会の
加藤 正彦会長

■お問い合わせ
「富田地区市民センター」
(富田鯨船保存会連合会事務局)
四日市市富田1丁目24-47
TEL 059-365-1141

富田鯨船保存会連合会

「鳥出神社の鯨船行事」(国指定重要無形文化財)の保存・継承活動を続ける四日市市富田地区の北島組・中島組・南島組・古川町の各保存会が連合して結成。皆さんの活動が実を結び、昨年12月に「桑名石取祭の祭車行事」、伊賀市の「上野天神祭のダンジリ行事」とともに、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。

三重県内で活動するグルーブを紹介する「いま、グルーブネット」。「鳥出神社の鯨船行事」を継承する「富田鯨船保存会連合会」をご紹介します。この日は、中島組 神徳丸保存会の加藤 正彦会長にお話を伺いました。

—— 鯨船行事は、陸上で捕鯨の様子を再現した珍しい行事と聞きましたが、富田では捕鯨を行っていたのですか？

加藤：普段から捕鯨をしていたわけではなく、シコイワシ漁が中心でした。シコイワシとはカタクチイワシのことで、ほかに小女子(イカナゴ)などの小魚を

捕っていたのです。すると時には、小魚の群れを追って伊勢湾内にクジラがやってきます。そして、クジラの姿が見えれば大漁というわけで、豊穰や富貴の象徴であるクジラを仕留める様子を再現して、大漁への感謝や魚の供養を祈願する行事となりましたようです。始まりは、江戸時代末期といわれています。

——なるほど。行事は、毎年8月14日と15日の2日間行われるのですか？

加藤：本来は、鳥出神社の秋の大祭に奉納されていたのですが、秋は漁で忙しいことと、お盆には人が集まるということと、この時期になりました。14日は、まず鎮火祭で祈禱をしてもらっ

てから、それぞれの組で鯨船を曳き回す町練りをします。15日は、神社の鳥居の前や境内などで鯨突きをする本練りが行われ、その後、無事終了したお礼のための宮参りで終了です。

——鯨船はとても豪華で見ごたえがありますが、飾りなどには意味があるのですか？

加藤：鯨船は、全部で4艘あり、それぞれにテーマがあるので、それを知っていると、より一層楽しめると思います。北島組の「神社丸」の場合は朝で、船の横幕に朝風の海にシャチが描かれています。中島組の「神徳丸」は昼間をテーマとしていて、龍がゆつたりと泳いでいる様子、南島組の「感應丸」は夕方、たて



勢揃いした4艘の鯨船※

がみを振り乱した龍と波がデザインされています。そして古川町の「権現丸」の場合は、凧い大海とチドリが描かれています。へさきや屋根の形も違うので、4艘を見比べてみてください。

——町練りや本練りでの鯨船と鯨との駆け引きも見ものだと伺いました。

加藤：町練りは、狭い路地で進むため、鯨船や鯨を間近に見られるのがいいし、逆に本練りは、広い境内などで行うから、鯨船

の揺らし方も鯨の動きも激しいから、すごい迫力ですよ。鯨は、竹の枠組みに布や漁網などを張ったものですが、これを被るのは20歳前後の若者たちだから、逃げ足は早いし、ある時点で反撃に出たり、狭い場所に追いつめたとしても、鯨船の横からスリと逃げたりするので、なかなか仕留めることができないのです。押し合いへし合いして、最後は長老が止めに入ることもあります。だから最低でも30分、

普通1時間以上かかります。

——それは大変ですね。

加藤：鯨は約2〜300キログラムあるので、被る若者も疲れるでしょうね。また、2トンもの重さがある鯨船を操るのは20から50代くらいの人たちで、荒波にもまれるように左右に激しく揺らしながら鯨を追いかけるのは、本当に重労働です。船の上には、鯨にモリを突く役の、ハタシ(羽刺し)・小学5・6年生1人とハタシを支える腰持ち2人、槽をこぐ役の、ローコギ・幼児4人、そして太鼓を叩く青年3人が乗っています。子どもたちは、振り落されないように必死になつていますがみついていますよ。

——地域の皆さんが丸となつて継承してきた行事が、ユネスコの無形文化遺産に登録された時は、喜びもひとしおだったのでは。

加藤：とても嬉しいですが、でも同時にこれから100年先まで残さないとけないという責任を強く感じています。特に私が

会長を務める中島組は、人数も少ないため、後継者育成は待ったなしの状況です。そこで、地域以外の人たちにもサポーターになつてもらおうと考えています。まずは、行事のことも知ってもらおうと、今年の5月・6月・7月の第3日曜日に「富田地区市民センター」で「鯨船市民講座」を開催します。興味がある方は、ぜひ参加してください。

また、鯨船に触ってもらおうとアーの開催や、観覧席や駐車場の整備など、できることからやっていたいと考えています。

——ありがとうございました。加藤会長のお話からは、行事への深い愛情と同時に、継承することの重みを感じました。この夏は、迫力ある鯨船と鯨の攻防を見に行つてはいかがでしょう。



ユネスコの無形文化遺産登録を記念したバッジ



大きく傾いた鯨船※



鯨船に乗った「ハタシ」が鯨を仕留める様子※

※印の写真は取材先から提供していただきました

インタビュー……中村真由美